

藤原先生の思い出

鈴木清志(元 JOFPA 及び FOT 会員、現 HANDS 理事)

私が最初に藤原先生にお目にかかったのは、10 年前の 1996 年、ミンダナオ島の空港でした。私はブラクール村にいる自分の里子に会うために訪問したのです。当時、先生は FOT(少数民族里親の会)の会長で、会が支援している山岳民族の集落、ブラクールでの仕事を終え、帰国するところでした。

ブラクールは、辺鄙な山中にある集落です。行くだけでも大変なところ。トラックの荷台で揺られながら山道を 3 時間登らなければなりません。道路は雨で赤土がえぐられているのでトラックは船のように揺れます。そんな過酷な旅を終えてきたのに、先生は疲れも見せず笑顔で私を迎えてくれました。背筋がまっすぐ伸びがっちりした体格の先生は、とても 67 歳とは思えません。そのときに撮った写真を見ますと、日に焼けた元気な会長の脇で青白い顔をした私が写っています。

先生の飛行機が発するまでの間、30 分ほどお話をうかがうことができました。先生は、ブラクール部落の近くを流れる川に小型の発電機を設置して電気を供給できないかと考えられていたようです。農学部教授であられた先生はブラクールのためにやりたいことがたくさんあるようでした。先生はビールを飲みながら、楽しそうに夢を語られていました。

お亡くなりになった今も先生がブラクール村を駆け回っている姿が目には浮かびます。ご冥福をお祈り申し上げます。



ブラクール近況

<ハイスクール生徒数が増えました> 今年のブラクール小学校、ハイスクールの入学・進級登録が無事終了しました。それぞれ、147 人と 90 人で、合計 237 人がブラクールで学んでいます。授業料は無料のはずの周辺公立ハイスクールが、各種教材費の値上げを父母に要求したことから、遠くてもブラクールを選ぶ子どもが増えました。なお、HANDS 会員が支援している特定の奨学生/里子(合計 20 人)もそれぞれ無事進級しました。子どもの現況報告は 8 月末までに関係の皆様にお届けする予定です。

<また 1 人手遅れで死亡> 一方で、奨学生候補だったロミオ君(10 歳 3 年生)について、破傷風のために死亡したという報告を受けました。昨年 7 月の 2 年生の男児と同じく、お金がなくて病院に運んだ時は手遅れだったケースです。今後同じような犠牲者を増やさないために、せめてブラクール小学校児童については、対応策を PFP と検討したいと思います。

<自主財源としてのバナナ栽培> 当会の支援金は昨年そのまま現状維持(月 35 千円)で、小学校教師 5 人分の給与を支えています。諸物価急騰の折、追加財源としてアグロフォレストリーで植えたバナナに期待が集まっています。自家消費を超える収穫が可能になり学校経費に充当できる予定です。

モスン教育プロジェクト近況

<稲の原生種の保存> 故藤原先生がレックス神父と構想を温めていた Great Work 事業では、昨年からのモスン教育の対象住民(おもに母親)に Upland Rice と総称される原生の陸稲数種類の栽培を奨励しています。すでに収穫した陸稲は一缶(500g 程度)のみ本事業運営経費に返済し、残りはこの陸稲原生種保存活動に参加した家族の自家消費や換金用に当てられました。(写真:順調に育つ陸稲と住民。5 月撮影)



<今年のモスン学校生徒> ツバツで 37 人、バサグノフォークで 22 人が登録。HANDS 支援金の減額が響いたのか、今年は教師も 4 名に減りましたが、年中、年少に分かれて元気に学んでいます。